紫陽花

泉鏡花

一

色青く光ある蛇、おびたゞしく棲めればとて、里人は近よらず。其野社（そののやしろ）は、片眼の盲ひたる翁ありて、昔より斉眉（かしず）けり。

其（その）片眼を失ひし時一たび見たりと言ふ、几帳の蔭に黒髪のたけなりし、それぞ神なるべき。

ちかきころ水無月中旬、二十日余り照り続きたる、けふ日ざかりの、鼓子花（ひるがお）さへ草いきれに色褪せて、砂も、石も、きら〳〵と光を帯びて、松の老木（おいき）の梢より、

糸を乱せる如き薄き煙の立ちのぼるは、木精（こだま）とか言ふものならむ。おぼろ〳〵と霞むまで、暑き日の静さは夜半にも増して、眼もあてられざる野の細道を、十歳（とお）ばかりの美少年の、尻を端折（はしょ）り、竹の子笠被りたるが、跣足（はだし）にて、

「氷や、氷や。」

と呼びもて来つ。其より市に行かんとするなり。氷は筵包（むしろづつみ）にして天秤に釣したる、其片端には、手ごろの石を藁縄（わらなわ）もて結びかけしが、重きもの荷ひたる、力なき身体のよろめく毎に、石は、ふらゝこの如くはずみて揺れつ。

とかうして、此の社の前に来りし時、太き息つきて立停りぬ。

笠は目深(まぶか)に被りたれど、日の光は遮らで、白き頸(うなじ)も赤らみたる、渠(かれ)はいかに暑かりけむ。

蚯蚓(みみず)の骸(むくろ)の干乾びて、色黒く成りたるが、なかばなま〱しく、心ばかり蠢(うごめ)くに、赤き蟻の群りて湧くが如く働くのみ、葉末の揺るゝ風もあらで、平たき焼石の上に何とか言ふ、尾の尖(さき)の少し黒き蜻蛉(とんぼ)の、ひたと居て動きもせざりき。

かゝる時、社の裏の木蔭より婦人(おんな)二人出で来れり。一人は涼傘(ひがさ)畳み持ちて、細き手に杖としたる、いま一

人は、それよりも年少（わか）きが、伸上るやうにして、背後より傘さしかけつ。腰元なるべし。

丈高き貴女のつむりは、傘のうらに支ふるばかり、青き絹の裏、眉のあたりに影をこめて、くらく光るものあり、黒髪にきらめきぬ。

怪しと美少年の見返る時、彼（か）の貴女、腰元を顧みしが、やがて此方（こなた）に向ひて、

「あの、少しばかり。」

暑さと疲労（つかれ）とに、少年はものも言ひあへず、纔（わずか）に頷きて、筵を解きて、笹の葉の濡れたるをざわ〳〵と搔分けつ。

雫落ちて、雪の塊は氷室より切出したるまゝ、未だ角も失せざりき。其一角をば、鋸もて切取りて、いざとて振向く。睫(まつげ)に額の汗つたひたるに、手の塞(ふさ)がりたれば、拭ひもあへで眼を塞ぎつ。貴女の手に捧げたる雪の色は真黒なりき。

「この雪は、何(ど)うしたの。」

美少年はものをも言はで、直ちに鋸の刃を返して、さら〱と削り落すに、粉はばら〱とあたりに散り、ぢ、ぢ、と蟬の鳴きやむ音して、焼砂に煮え込みたり。

二

あきなひに出づる時、継母の心なく嘗（かつ）て炭を挽きしまゝなる鋸を持たせしなれば、さは雪の色づくを、少年は然りとも知らで、削り落し払ふまゝに、雪の量は掌（たなそこ）に小さくなりぬ。

別に新しきを進めたる、其もまた黒かりき。貴女は手をだに触れむとせで、

「きれいなのでなくつては。」

と静にかぶりをふりつゝいふ。

「えゝ。」と少年は力を籠めて、ざら〱とぞ掻いたりける。雪は崩れ落ちて砂にまぶれつ。

渋々捨てて、新しきを、また別なるを、更に幾度か挽いたれど、鋸につきたる炭の粉の、其都度雪を汚しつつ、はや残り少なに成りて、笹の葉に蔽はれぬ。
貴女は身動(みじろ)きもせず、瞳をすゑて、冷かに瞻(みまも)りたり。
少年は便(たより)なげに、
「お母様(つかさん)に叱られら。お母様(つかさん)に叱られら。」
と訴ふるが如く呟きたれど、耳にもかけざる状(さま)したりき。附添ひたる腰元は、笑止と思ひ、
「まあ、何うしたと言ふのだね、お前、変ぢやないか。いけないね。」
とたしなめながら、

「可哀さうでございますから、あの……」と取做すが如くにいふ。

「いゝえ。」

と、にべもなく言ひすてて、袖も動かさで立ちたりき。少年は上目づかひに、腰元の顔を見しが、涙ぐみて俯きぬ。

雪の砕けて落散りたるが、見る〳〵水になりて流れて、けぶり立ちて、地の濡色も乾きゆくを、怨めしげに瞻りぬ。

「さ、おくれよ。いゝのを、いゝのを。」

と貴女は急込みてうながしたり。

こたびは鋸を下に置きて、筵(むしろ)の中に残りたる雪の塊を、其まゝ引出して、両手に載せつ。

「み、みんなあげよう。」

細りたる声に力を籠めて突出すに、一掴みの風冷たく、水気むら〳〵と立ちのぼる。

流るゝ如き瞳動きて、雪と少年の面を、貴女は屹(きつ)とみつめしが、

「あら、こんなぢや、いけないツていふのに。」

といまは苛(いら)てる状(さま)にて、はたとばかり掻退(かいの)けたる、雪は辷(すべ)り落ちて、三ツ四ツに砕けたるを、少年のあなやと拾(ひろ)ひて、拳を固めて掴むと見えし、血の色颯と頬

を染めて、右手（めて）に貴女の手を扼（とりしば）り、ものをも言はで引立てつ。

「あれ、あれ、あれえ！」

と貴女は引かれて倒れかゝりぬ。

風一陣、さら〳〵と木の葉を渡れり。

三

腰元のあれよと見るに、貴女の裾、袂、はら〳〵と、柳の糸を絞るかのやう、細腰を捩りてよろめきつゝ、ふたゝび悲しき声たてられしに、つと駈寄りて押隔て、

「えゝ！　失礼な、これ、これ、御身分を知らないか。」
貴女はいき苦しき声の下に、
「いゝから、いゝから。」
「御前（ごぜん）――」
「いゝから好きにさせておやり。さ、行かう。」
と胸を圧して、馴れぬ足に、煩はしかりけむ、穿物を脱ぎ棄（す）てつ。
引かれて、やがて蔭ある処、小川流れて一本の桐の青葉茂り、紫陽花の花、流にのぞみて、破垣（やれがき）の内外に今を盛りなる空地の此方に来りし時、少年は立停りぬ。
貴女はほと息つきたり。

少年はためらふ色なく、流に俯して、摑み来れる件の雪の、炭の粉に黒くなれるを、その流れに浸して洗ひつ。

掌にのせてぞ透し見たる。雫ひた〱と滴りて、時の間に消え失する雪は、はや豆粒のやゝ大なるばかりとなりしが、水晶の如く透きとほりて、一点の汚もあらずなれり。

きつと見て、

「これでいゝかえ。」といふ声ふるへぬ。

貴女は蒼（あお）く成りたり。

後馳（おくれば）せに追続ける腰元の、一目見るより色を変えて、

横様にしつかと抱く。其の膝に倒れかゝりつ、片手をひしと胸にあてて。

「あ。」とくひしばりて、苦しげに空をあふげる、唇の色青く、鉄漿（かね）つけたる前歯動き、地に手をつきて、草に縋（すが）れる真白き指のさきわなゝきぬ。

はツとばかり胸をうちて瞻（みまも）るひまに衰へゆく。

「御前様——御前様。」

腰元は泣声たてぬ。

「しづかに。」

幽（かすか）なる声をかけて、

「堪忍（かんにん）おし、坊や、坊や。」とのみ、言ふ声も絶え入り

ぬ。

呆れし少年の縋り着きて、いまは雫ばかりなる氷を其口に齎（もたら）しつ。腰元腕（かいな）をゆるめたれば、貴女の顔のけざまに、うつとりと目を睜（みひら）き、胸をおしたる手を放ちて、少年の肩を抱きつゝ、ぢつと見てうなづくはしに、がつくりと咽喉に通りて、桐の葉越の日影薄く、紫陽花の色、淋しき其笑顔にうつりぬ。

底本：「花の名随筆６　六月の花」作品社
　　１９９９（平成11）年５月10日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二巻」岩波書店
　　１９４２（昭和17）年９月
入力：門田裕志
校正：林　幸雄
２００２年４月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。